

## 書評二題

工藤 茂

### 木村久通典著『錨と星の賦』

この書のおしまいの方に、次のような個所がある。

へ海と陸とこそ違え、出発はなにからなまでに似通っているかのようにはみえた水野広徳と桜井忠温。だが文名を得たのちの二人は、まさに対蹠的な方向へ彼らの人生航路を求めた。片や省部に位置して榮進の道を歩み、片や大佐に昇りながら、非戦論、平和論者に転じて最後までその信念を貫きとおした。水野の予言は恐ろしいほどに的中したが、新生日本を見ることなく急逝したのは痛恨の極みであり、その死はきわめて悲劇的であった。水野の悲劇の真因は、歴史の行方が常人よりも見えすぎたことだったのかもしれない。だが水野は、とにかく歴史が、己れの見透しのままに展開するさまを、自分の眼で実見したの

である。祖国の全面降伏という悲惨な結末ではあったにしろ……。一見「不幸」とも受けとられる広徳の人生こそ、あるいは真に幸福だったと言えるのではないか。同時に、桜井忠温が経験しなければならなかった敗戦による環境の激変と、人の世の生き難さを、わたくしは想った。▽

この個所に端的に示されているように、「錨と星の賦」は「此一戦」の著者水野広徳と『肉弾』の著者桜井忠温の伝記である。けれどもこれは、決して読み易い伝記物語ではない。おそらくそれは、虚構を嫌い、なるべくそれを排除しようとする著者の厳しい執筆態度に起因するものであろう。ここに展開するのは、したがって小説のような二人の生活の具体的な場面ではなく、むしろその精神史であった。これがこの書の第一の特色と言える。

第二の特色はその時間の扱い方にある。そのひとつは、二人

の伝記が、著者の、松山（水野と桜井の郷里）行の船上から始まり、そこから帰る著者の船上での感慨で終っているということである。もともと後者の場合は再度の松山行の帰りなのだけども。その船上の著者の感慨が、冒頭の引用部分であった。

もう一つは、へわたくしは同時進行的な手法で彼らの人生を照射しようと試み、と著者自身の書いている。その時間の扱い方、つまりこの作品の構成にあった。この手法こそ、その次のこの書のもっとも本質的な第三の特色を際立たせるのに有効な方法だったのである。

この書は旧陸海軍への賛歌でもなければ、心躍る戦闘場面を描いたものでもない。たしかに錨は海軍の軍人であった水野広徳を、そして桜は陸軍の軍人であった桜井忠温を表すメタファーではある。しかし著者の意図は、この同郷であり、中学の同窓生であり、職業軍人であり、それ以上に文章家であった二人を対比させることによって、前者水野の反逆精神を把え、その精神の核をなす真の愛国心を扶剔ついですることにあつた。内部からの海軍批判者大田三次郎、その系譜を継ぐものとして著者の考えていた者が、この水野広徳だったのである。それ故にその精神史をたどることは、とりもなおさず著者自身の反権力志向と反戦の意志を確認することであり、同時にその精神の芯をなす、著者自らの愛国心を確かめる作業でもあつた。そしてこの系譜はそのまま著者自身に引き継がれたのである。

以上が第二の特色によって抽き出されたこの書の第三の特色

であつた。そしてこの特色の故に、私はこの書を、公然と軍拡が主張され、危険な方向に走り出しかねない現代日本に生きている若い人々、特に大学生諸君に薦めたいのである。（昭和55年11月25日発行・新評社）

### 土屋北彦編著『大分の民話《伝説》』

読んでいてたいそう楽しい本である。その標題が示すように、ここには大分の伝説が集められている。伝説には必ず記念となる物がある。しかしその語り口が一定しないことから、柳田国男などは厳しく口承文芸から除外していた。けれども今日では、昔話と伝説、それに世間話までも含めて民話と呼んでいるようである。たしかに、このようにして記録されてみれば、その語りの型も一定してくるというもの。

この伝説が歴史よりも重みを持つている理由を、編著者はへ為政者にとって都合が悪く、文字に残されずに葬られた事実であつても、民衆にとって、それが後世に伝えられねばならぬ事からであつたならば、伝説という形で必ず残されたであろうからと述べる。編著者のこのような態度によって記録される時、この伝説集は、前述の『錨と星の賦』と相通じるものとなる。だが伝説はもう一つの別な性格をも持っていたのだ。

この本の一八九頁に「大蛇に魅入られた姫」という伝説が載っている。これは豊後緒方氏の出自を語る伝説である。編著者

がその解説編で触れているように、これはまた大三輪伝説にも共通するものであった。この場合、蛇というのは決して爬虫類としてのそれではない。霊峰の神が蛇の姿でこの世に現じたものである。そしてこのような神と美女との間に誕生した神の子の裔こそ、英雄となるに相応しい人間なのだとする我々日本人の心意が、この伝説には反映していたのである。つまり伝説とは、先祖代々伝承されてきた日本人の心意現象であった。それゆえそこには、古い信仰・神話が残っていたのである。

もっとも「解説編」に端的に示されているように、この本の編著者はそのことを十分に理解していて、この一冊をまとめている。我々がこの本を安心して楽しむ所以はここにあった。

(昭和55年10月15日発行・榎アドバンス大分)